

令和 2 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
一般入学選考後期日程

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

【小論文 問題】

問題 次の文章を読んで、筆者の理想とする「ハーフであっても特別視されない社会」を実現するために、あなたはどのような考え方や生き方が大切だと思いますか。これまで自分が経験したり学んだりしたことを具体的に挙げて、あなたの考えを800字以内で述べなさい。

なお、考え方そのものは評価の対象とはなりません。

「ハーフでいいじゃない」

宮本エリアナ（ミス・ユニバース日本代表）

周囲との違いを感じるようになったのは、幼稚園のころ。新しく友達ができると、必ず「どこから来たの？」と聞かれたものです。日本で生まれて、みんなと同じように日本語で話しているのに。

私はアフリカ系アメリカ人の父親と日本人の母親のもと、長崎県の佐世保で生まれ育ちました。いわゆるハーフです。佐世保は、通りを在日米軍の軍人が闊歩して、公園には英語の標識が掲げられ、九州にあってはグローバルな街です。とはいえ、日本人とアメリカ人の生活エリアは分かれているため、日本人として暮らす私は目立ったのでしょうか。

今年の3月12日、私は長崎県代表として臨んだ「ミス・ユニバース」日本大会において、日本代表に選ばれました。最終審査に先立って行われた約2週間にわたる合宿「ビューティ・キャンプ」では、ダンスやウォーキングなどのトレーニングを受けました。

反響は想像以上で、世界中のメディアから取材が殺到しました。

一方で、こちらはある程度予期していたとはいえ、インターネット上では、「日本代表にふさわしくない」「なんでブラックが選ばれたんだ」とバッシングの嵐となったのです。改めて自分のアイデンティティと向き合う機会となりました。

私が尊敬する「歌姫」、マライア・キャリーさんは、ブラックとホワイトの両親を持つミックスでした。幼少時代には「おまえは白人なのか、黒人なのか」と差別を受けていたといいます。それでも、マライアさんは「どちらでもない。私は私よ」と意に介さなかった。

子どものころ、私は自分のことを好きになれませんでした。肌は黒いし、「ハーフであること」はコンプレックスでしかなかった。

大きな転機となったのは、15歳の秋、「自分のルーツを知りたい」との思いから、離婚した父の地元アーカンソー州の高校に留学したときです。当初、たどたどしい英語しか話せませんでした。私と似たようなミックスの子はまわりに何人もいました。自分が特別視されない環境は心地よかった。ようやく自分自身を受け入れ、「私のままでいいんだ」という心境に至ったのです。

とはいえ、アメリカ文化になじみがない私にとって、現地での生活は一事が万事、戸惑いの連続でした。トイレに入っても個室のドアの下には大きな隙間があって、ウォシュレ

ットもない。一方、帰国して耳に飛び込んでくる日本語にはホッとしました。

バッシングはどうしても目に入りますし、わざわざ「こんなことが書いてあったよ」と教えてくれる人もいます。でも、一か月もしたら、吹っ切れました。気にしても何も変わらないから。

もちろん応援のメッセージもいただきました。特にハーフの子や、その親御さんからは「勇気づけられた」「子供の未来が明るくなった」とたくさんの声が届きました。私の存在がプラスの影響を与えている、そのことは本当にうれしく思います。

実は、最初に「ミス・ユニバースに出ませんか」と声をかけてもらったとき、あまり興味を持ってませんでした。

気持ちが変わったきっかけは、去年の春に私の友人が、ハーフであることを理由の一つとして自らの命を絶ってしまったことです。「自分の居場所がわからない」と相談を受けていた矢先の出来事で、彼はまだ二十歳でした。ハーフへの偏見や差別をなくして、このような悲劇が二度と起きないようにするためにも出場することを決意したのです。

日本では「ハーフ・タレント」や「ハーフ・アスリート」の活動が話題になっています。現在二十歳の私と同世代が頑張っている姿は励みになるものの、最終的には「ハーフ」という区分がなくなればいい、と考えています。ハーフであっても特別視されない社会が私の理想です。（後略）

（文藝春秋 2015年11月号）